ぐさめんためにうまれ来つる詩の神の子なり。をごれるものをおさへ、なやめるものをすくふべきは我がつとめなり。されば四六時中いづれのときか打やすみてあらんや。我がちを盛りし此ふくろ破れざる限り、われはこの美を残すべく、しかしてこのよ、ほろびざる限り、わが詩は人のいのちとなりぬべきなり」とほこりたかく書き残している。

一葉のナルシズムはすがりついている母も妹も樋口家なるものもふりすてて、ひとすじに作家道に徹することにあつた。しかも一葉は同時に、武士の娘として純粋に生真面目に潔癖に生きようとした。作家精神の豊満自在かつ厳正非情と、一葉の幼いほどのむきなひとすじな生き方とが一致するかどうかは、軽々に判断は出来ないが、一葉の世にない今から考えれば、一葉の生は相容れざる二つに分れたまま相容れざる哀しみを文学の世界に訴えるに終つたといえよう。

即ち「たけくらべ」に於いては作家への夢は何がしの学林にゆく信如に托され、一葉の理想の愛は水仙の作り花ひとつに示され、現実の一葉は暗い運命の羈絆の場に美登利と共に残されたのである。

現実の場にあってはこれほど確然と乖離する運命にある一人の人間の個の矛盾が、天与の麗筆に支えられて、渾然一体となっているところに「たけくらべ」の不思議な魅力を感じると同時に、日本文学に於ける近代的様相の本質を観る思いがするのである。

――一九五八・二・十――

註1　明治二九年から三四年にかけての文芸批評誌。季刊。森鷗外主宰。このなかの三人冗語の欄は匿名で、斎藤緑雨、幸田露伴、森鷗外が当時の作品を縦横に批判した。

註2　寿星社刊八四頁「樋口一葉のリアリズム」。

註3　半井桃水の弟浩が、これも親類から預かっていた鶴田たみ子と関係ができ、その間に出来た子を一時桃水がひきとって二人を別れさせたが後に又一緒になる事件があった。それを一葉は桃水とたみ子のスキャンダルと誤解してひそかに桃水を憎んだりする。

註4　日記「筆すさび一」に「みの子の君ものつつみの君とつけて笑ひ給ふに、こと人も、いつしか、さなんいふ。」とある。

宝暦五年「双扇長柄松」の上演について

浅野　達　三

近松門左衛門の書いた「心中天の網島」は享保五年（一七二〇）大阪道頓堀の竹本座での初演以来今日まで繰返し文楽や歌舞伎に上演されている。蓋し着想構成の妙を物語るもので、数ある近松作品の中でも名作と称してよいものであろう。

従つて後になつてこの小春・治兵衛の物語は色々に改作され、「双扇長柄松」、「中元噂掛鯛」、「置土産今織上布」等が出たが、更に安永七年には半二の「心中紙屋治兵衛」が北の新地西の芝居に掛けられ、改作の決定版とも考えられるものとなつた。又増補版「時雨の炬燵」も書かれるに至つた。

「双扇長柄松」は最初に書かれた改作である。然も「天の網島」の竹本座に対して、これはその競争相手である豊竹座の上演である。道頓堀の操り芝居は益々盛んになつて来ており、浄瑠璃も殆んどが合作形式で作られる、と云つた風に種々の点で前作と異る要素を多く持つている。そこで本作が上演された際の諸事実を明白ならしめ、その環境を調査するのが本稿の目的とするところである。

一

上演の事実については次の如く記されている。

古今外題年代記の当流豊竹越前少掾の部には次の如くある。

双扇長柄松　同年七月七日初日操踊
当秋堺へ行三年奥州軍記

同年とは宝暦五年の事である。

浄瑠璃譜の諸事聞書往来下　豊竹芝居の部には

同七月七日初日。　双扇長柄松。　此浄るり不入にて。　一座堺へ引越す。

とあつて興行の成績についても記しているのは興味深い。

外題年鑑　当流豊竹越前少掾の部には

双扇長柄松　同年七月七日
作者　並木永助　豊竹上野
切に操踊。　当秋堺行。　後三年奥州軍記。

とある。但しこの作者名は、宝暦版・明和版・安永版・寛政版と四種ある本書のうち寛政版のみに見られる。

更に、声曲類纂巻之二　豊竹座浄瑠璃外題には

小春治兵衛双扇長柄松
同七月。永介・一鳥・三蔵・三津飲子・黒蔵主・上野。切に操踊。当秋堺へ行。

とあつて作者名は最も詳しい。これは丸本所載の作者名とも一致しているので信じて良い。然しこうなると先の外題年鑑に永助・上野

の二名のみとなつているのはおかしいことになる。上記の各書は何れも近世演劇史の記録を留める貴重な書物ではあるが、外題年鑑にはやゝ疎漏な点も見受けられる一例である。

尚西沢文庫伝奇作書続篇上の巻の浄瑠璃東西外題番付には、西方勧進元豊竹のところ、前頭の殆んど最後のあたりに双扇長柄松の名が見える。浄瑠璃譜の記事と考えあわせても本作は興行的には可成り不評判であつたらしい。

二

作者に就いては近世刊行の演劇書の中に次の人々の説明がある。

浄瑠璃大系図―一鳥・永輔・三蔵・上野・黒蔵主・飲子

西沢文庫伝奇作書　初篇中の巻―永助

声曲類纂巻之二―一鳥・三蔵・黒蔵主・飲子・上野・永輔

戯財録―一鳥・黒蔵主・永輔

今古参考南水漫遊拾遺　二の巻―一鳥

西沢文庫伝奇作書拾遺　上の巻―永輔・一鳥・三蔵・黒蔵主・飲子・上野

これらの各書に説くところは若干相違した点もあつて甚だ面倒であるが、主なところは次の様にまとめられる。

浅田一鳥は京堺町に住んで謡の師匠をしていた。一鳥単独の作と云うものは殆んどなく、作者連名許りである。これは此時代一般にそうであつて、後年に至つてこの傾向は益々著しく、各段毎に作者を変えて新しい境地を開こうとしたのであるが、必ずしもこの方法が成功したとは言えない。船頭多くして船山に上る、の譬も当てはまりそうである。一鳥の作として一段一場が上演されるものは今日も多く見られる。

永輔・永介・永助は同一人を指すものと思われるが、永輔と記すのが一般的の様である。歌舞伎作品を主として書いたが、浄瑠璃の方にも手を出し、或場合には豊竹、次には竹本と両座の作を為している。

後の人に就いては特記すべきものは見当らず、単に名前があがつているのみである。

三

この双扇長柄松は巣林子の名作心中天の網島の改作としては余りにも雑然としたものであり、文章辞句の点に於いても原作とは比較にならない。大阪長柄の国分寺附近の一本の松の枝に小春と治兵衛の二人の辞世を書いた一つがいの扇を吊り、その側で縊死すると云う結末からその題名がついたものである。

非常に多くの人物が各段毎に夫々主要な役を担つて活躍するので随分こみいつており、本筋と関係のないつけ足りが余りにも多過ぎる感がある。小春治兵衛の名は使つているが結構は原作と可成り異なつている。

段組は次の如くである。

上の巻〈北野了幸寺の段／問屋橋の段／田蓑橋の段〉

中の巻〈俄ねり物の段／天神祭の段／曽根崎新地の段〉

下の巻〈道行　対の染帷子／長柄松の段〉

四

原作の天の網島の場合には太夫・三味線・人形遣いが誰であつたかは殆んど記録が無く、外題年鑑などにも極く僅かの記載あるのみでその調査は可成り難しく、只その前後に上演された場合から推測して大体の目星をつけるしか出来なかつた。然し本作の頃になつて来ると上演の際の番附を見ることが出来るので確実に出演者の名前が解る。

そしてこの出演者に就いての記述を求めると、丁度宝暦六年刊の竹豊故事がある。本作の上演は宝暦五年七月であり、竹豊故事は六年であるからその記述は全く新しいもので、そつくりそのまゝをとりあげる事が出来る。

竹豊故事の巻之下に浄瑠璃古今之序　並当時之太夫名人之評と云うのがあつて、これは古今集の仮名序をもじつて浄瑠璃語りのことを色々述べているのでなか〳〵面白いものである。非常に分量が多いので割愛するが、こゝではその次に簡単な評語で述べられている批評のうち、本作に関係している主要な人の分のみをあげる。

優艶妙絶音声無類　豊竹若太夫
幽玄至妙潤色無比　豊竹駒太夫
至要表珍　豊竹鐘太夫
功労天晴　豊竹新太夫
三味線　妙手　野沢文五郎
功若　富沢正五郎
人形おやま　綾飾芬芳美壮　藤井小三郎
立役人形　莫大挙動発明無類　若竹東二郎
粉骨時明　若竹伊三郎

これ以外に外題年鑑や古今外題年代記・竹豊故事・声曲類纂・西沢文庫の各書等も参考とする点が多く又宝暦八年に刊行された女大名東西評林に於いてはこれらの一座の人達に位付をして詳しく芸評を記しているので参考となる点が多い。歌舞伎評判記が多く刊行されているのに対して人形劇の方は非常にこの種のものが少いのだが、この頃になつて来るとやつとそこ〳〵評判記らしいものが顔を見せて来る訳である。こゝでは書名をあげるのみにとゞめる。

五

人形と舞台装置については、此頃には益々進歩した点が見られる。浄瑠璃譜には本作上演の八年前に当る延享四年の悪源太平治合戦に就いての記録がある。当時の名人として知られた若竹東二郎の新工夫になる屏風手又は数の子手と称されるものが出来、指が三つに折れて動く様になつた。ついでは指が五本とも動くつかみ手が工夫され、豊竹座のものは手首までも動かすことが出来た。そのほか胴串・肩板・丸胴などにも豊竹座は竹本座に見られない独特のものがあつた様だし、更に人形遣いの頭巾も耳が立つており、手袋から舞台下駄に至るまで違つたものを使用した。この間の事情について

「人形かしらは。竹本座笹尾八兵衛より。いろ〳〵名あるを細工し昔より伝はれども。豊竹は元禄年中よりはじまりし故。人形頭とも名細工あれども何の浄るりの何頭といふ事を聞ず。若竹東二郎出精より。西の頭を写し少々違ひ写されし故。此砌よりは人形

の頭の名。当り浄るりにしたがひ。しやう〳〵は申せし也。」と新興豊竹座の人形を説明している。西とは竹本座のことであり、東は豊竹座をさしている。

下つて宝暦十二年のあたりでは人形頭の図を六つ描き、細工人・役名・頭に対する評判まで記している。

更に本作上演の翌年に刊行された竹豊故事の巻之中には「竹豊東西の流芝居繁昌之事」の章があつて、従来の黒幕に簾だけと云う背景、簡単な人形衣裳、などから次第に進歩して足付の人形が作られて来た事を述べ、又竹豊両座の舞台改善競争に就いて

「東は西に負まじ西は東に勝らんと互ひに励み出来、益々芝居繁栄し、浄瑠璃の作者は種々様々の趣向をあみ出し、道具建にも金銀を惜しまず、金襖にて舞台を輝かし、或は数奇屋懸りの粋成思ひ付に智恵袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬緞子繻子金襴等にて美麗を尽し、詰人形の外は皆々足付と成、出遣ひの外は介錯足遣ひ立懸り歌舞伎役者の所作より増りて天晴見物事也。」

とある。これによると今日の舞台に可成り近い程度のものが此頃には出来上つていた様であり、技巧の極みの感がある。原作の天の網島が上演された頃に較べてその進歩の跡は誠に著しい。竹豊両座が新しい趣向をこらして観客の拍手にこたえていた有様がまじ〳〵とうかがえる次第である。

六

院本は次の二種を見ることができる。

○天理図書館蔵　十行本　七十枚

相当部厚いものであり、まして十行本の事だから随分の分量である。表紙は

双扇長柄松　豊竹越前少掾直伝
豊竹筑前少掾
菱屋治兵衛新板

とあり、裏表紙中側の奥附は

「右此本は太夫直伝の正本をくはしく板行致し候されば初心稽古のためこと〳〵くかながきにしてふししやうきり三味線ののりかたほどひやうし三重おくりのしな〳〵ひみつを残さずあらはし令板行者也

京寺町松原上ル西側　菱屋治兵衛板」

とある。山本版菊屋版の十行本の奥附と大体似通つたものであつて普通に言われる菱屋版の七行本の奥附とは大分異つている。

○京都大学図書館蔵　七行本　九十三枚

同じく部厚なものである。表紙は後のものらしく、奥附もついていない。

第一枚目

紙屋治兵衛
紀伊国屋小春　双扇長柄松上中下
上の巻　北野了幸寺の段　豊竹越前少掾

で始まる。九十三枚目の裏側には

宝暦五年乙亥七月七日　作者連名　並木　永輔
浅田　一鳥
難波　三蔵
三津　飲子
浪岡黒蔵主
豊竹　上野

と書かれている。

徳富芦花の「黒潮」について

橋本二三男

「黒潮」は明治三十五年一月二十六日から六月二十九日までの間、国民新聞に連載された。その執筆動機については、従来、よく芦花の社会主義思想と云うことと関連して考えられて来た。（例えば、寺園司氏「徳富芦花と社会主義」語文研究第三号、篠田太郎氏「徳富芦花論」、青野季吉氏「現代日本文学小説大系」第七巻解説）これは、芦花が「富士」の中で「『何故に余は小説を書くや』の中に『一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲す』と書いたとき、熊次は日本の総建直しを社会主義によつて断行し、維新の精神を徹底させねばならぬと考えていたのであつた。「黒潮」に人道の流れを高調した下心もそれに外ならなかつた。」（「富士」第三巻第七章一）とあることから論じられたものであるが、この「何故に余は小説を書くや」は、「富士」に述べられている如く「黒潮」よりも前に書かれたものではなく、明治三十五年九月国民新聞に発表されたものであり、芦花が「富士」を執筆する際の資料の取違えか時期の錯誤であることは明らかである。私は、ここでは、「黒潮」の構成とその中絶について考察しながら、その一端に触れてみたい。

芦花は、「黒潮」までに代表作である「自然と人生」「不如帰」「思出の記」などを出しているのであるが、それらで得た「光明小説作家」「家庭小説作家」と言う位置づけに満足出来ず、いつか「男らしい小説」を書きたいと考えていたようである。明治三十四年五月十六日の角田勤一郎氏宛の書簡の中で、「此次は少し柄になき政治小説の様なものをやつてみやふとも思居申候……」とあり、それを政治小説に求めたことが分る。このような時に「見たもの、聞いたものしか書けない」芦花が、この時から二年前に兄蘇峰から聞いたテーマを思い出したことは容易にうなづける。

兄は機嫌よく朝から色々と話込んだ末、斯様な小説を書いたらどうだと言ひ出した。明治政府に反感を持つて落魄して死んだ志士がある。其子が父の志をついで明治政府と闘ふ。追々時代が移り、子の眼界が開け光るものは光り、畢竟めでたし、めでたしに落着く。敵方に可憐な女性があれば面白いでせふ。（中略）それは面白いでせふ。モデルは直ぐ傍にある。（「富士」第三巻第六章一）